

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第27号

(2011年3月26日発行)



センターニュース第27号 目次

02	巻頭言	巻頭言にかえて	学部長	北村潔和
03	挨拶	退職するにあたって	センター教授	田尻信壹
04	寄稿	自らが継承できること	客員教授	本多信昭
05	寄稿	「けん玉セラピー」	客員教授	寺西康雄
06	報告	第13回発達と臨床の心理学講座		
07	報告	第14回発達と臨床の心理学講座		
08	学園通信	幼稚園 小学校		
09	学園通信	中学校 特別支援学校		
10	報告	教員・学生のための教育講演会		
11	報告	子どもとのふれあい体験／「学級担任論」		
12	報告	内留生からのメッセージ		
13	報告	国立大学実践研究関連センター協議会報告等		
14	報告	ビジュアルトライアスロン2010		
15	報告	センター日誌		
16	報告	センターの相談件数 あとがき		

巻頭言

巻頭言にかえて

人間発達科学部 学部長 北村 潔 和

最近の教育実践研究を読ませていただくと、掲載されている論文の多くは現場での実践研究がほとんどである。喜ばしいことと思っています。私がセンター長のときは、基礎的研究よりも実践的研究を掲載すべきとの話があった。どこまでが実践で、どこからが基礎的研究であるかの線を引くのは、私としては自信が無いが、新しい発見を求めてなおかつ法則が見つかるような研究は楽しい。

私は高岡市民病院で整形外科のスポーツ特殊外来を20年近く手伝っている。当初は、患者をグループ化して、基本的なリハビリメニューや現場へ復帰までのトレーニングメニューが作れるのではと考えていた。また、病院が私に求めているのは、この仕事だと感じていた。そこで、この外来が開設される前に、ストレッチから筋力や持久力トレーニングなどのメニューを考えた。しかし、実際に患者に向きあうと、患者個々の考え方、体力、体格、体の構造がまちまちであり、とても一般化できるものでないことを悟った。

それでも筋肉の硬さや、関節の柔らかさ、体の構造などを考えて、基本的なトレーニングメニューは作った。しかし、患者がスポーツ現場へ戻り、コートの上に立ち完全復帰するには、それにプラス患者個々の状態を把握した上での対応が必要になり、この対応が私に期待されている仕事だと感じるようになった。

この外来を開設するにあたって、担当される外科医と話したことは、スポーツ選手であるかぎり、目前に目標としてきた大会がある場合は、それに出場させることを前提に対応しようということであった。目標に向かってトレーニングを積んできたことを無にするような、「怪我が治るまでは安静にして試合に出ることは控えてほしい」といった対応はしないことを共通認識とした。そして、大会が終わってから選手に話を聞いて、今後のことを考えて治療をしよう。

この考えは教育現場での様々な問題と、それを解決していく実践と共通するものがあると考えている。教育実践研究の中に、何か私の担当している外来に参考になる事例はないものかとページを繰っている。

人間発達科学研究実践総合センターを退職するにあたって

センター教授 田尻信豊

私は2006年4月に人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターに赴任し、5年が経過しました。その間大過なく職責を果たすことが出来ましたのも、センター長の小川先生を始めとして下田先生、石津先生、菊袖さんらセンター教職員の皆様のお陰と感謝申し上げます。また、客員教授の本多先生、寺西先生には、教職の先輩として様々なご助言やご指導を賜り、大変有り難く存じております。着任時のセンター長であられました市瀬先生には、大学人としての自覚をお教え頂けたことは、富山大学での研究生活をおくる上での指針となりました。現在、他大学に移られておりますが、尾崎先生や稲垣先生とご一緒に仕事が出来たことは、楽しい思い出となっております。今振り返ると、人間発達科学研究実践総合センターでの5年間は大変充実した期間であったと思います。

今年度をもって本センターを退職するにあたり、お世話になった方々に感謝申し上げるとともに、本センターで過ごした年月を振り返ってみようと思います。私は学習環境部門に属し、教育実習の事前事後指導、教育講演会の実施、附属学校園との連携等の業務を担当致しました。とくに毎年実施してきた教育講演会については、とりわけ思い出深いものがあります。2009年11月に、「旅立ちの日に」（全国で最もよく歌われている卒業式の曲）の作曲者、高橋浩美先生をお招きして行った教育講演会は、120名を越える方々の参加がありました。当日は、人間発達科学部第1棟で一番広い教室を会場として用意したにもかかわらず、席が足りずに隣室から椅子を運ぶほどの盛況でした。講演の最後に、高橋さんの指揮で「旅立ちの日に」を全員で合唱しました。その時は、旋律が進むに連れて、参加者たちは感極まり泣きながらの合唱となりました。高橋先生による「妙花」というべき珠玉の教育実践を参加者に、とりわけ教職を目指す学生諸君に紹介出来たことは、私にとってこの上もない喜びとなっております。

今日の世界は、グローバルゼーションのもと、知識基盤社会、多文化共生社会、格差リスク社会など様々な顔を持つようになりました。そのため、これからの教員は、学校教育を通してこれらの複雑な社会への対応を迫られるだけでなく、成熟した市民社会の建設をも担う責任を有することになります。教員の修得すべきものは、これまでの時代と比べ、格段に増大しております。21世紀を生きる教員は教科や教育学の内容にとどまらず、市民としての幅広い豊かな教養をも必要となります。とくにこれからの10年間は日本の学校にとって激動の時期を迎えます。文部科学省の試算によれば、今後の10年間に全教師の3分の1が新たに採用された教員と入れ替わるとのことです。教員養成の果たすべき役割は、その重要性を一層増していくこととなります。富山大学でその中核を担うことになるのが、人間発達科学研究実践総合センターであると確信致します。本センターの益々のご発展を祈念申し上げて、退任のご挨拶といたします。

「継承されぬ経験・知識」という記事を読んで ～自らが継承できることとは～

センター客員教授 本多信昭

相次ぐ教師の問題指導に関連して、平成22年11月4日付北日本新聞に「継承されぬ経験・知識」という見出しの囲み記事が掲載された。「年配の知識や経験が継承されず、若手は子どもに“受ける”指導に走っている」から始まり、「相次ぐ問題指導はベテラン教師の“受ける”指導でも起きている」と続く。対応策としては、「問題が大きくなる前に水際で防ぐ教師同士のチームワークが機能していないのではないか。指導法を検証し合う組織作りが重要」、そして「学校で教師になりたての人には「チームで何が必要とされているのか常に考えて」と話し、教師が組織として機能することの重要性を伝えている」という結びで終わる流れになっている。

教採ガイダンスや学びのアシストを担当している私としては、「これから教員をめざす若者たちに、何をどう継承しているのか」と問い詰められたような気分である。いろんな先生と活動する中で教師としての資質を育てられたと思っているのが大部分の教師であろう。記事内容は教師間で自然発生する師弟関係のあり方を中心とする展開と思っていたが、既にそういう人間関係の存在を取材できない現状であることが垣間見えるようで、ますます寂しく感じている。

教員をめざす若人を支援する私としては、自らが継承できること再確認し伝える義務があると思っていたところ、平成23年1月、県内の教職員グループから「これからの教育を考える」という演題の講話を依頼された。出席者は学校では中堅以上の方が大多数だったので、自分が継承して欲しい内容を加味してお話した。以下に参加者の感想意見の一部を紹介し、内容を振り返ってみる。

- ・「誤答分析は自分たちで」ということを大切に実践していきたい。←全国一斉学力テストへ担任自らが主体的に関わり、自分たちの力で分析することが指導の改善に役立つ。偏差値を見直そう。
- ・明るくプラス思考でやっつけようと思った。←明るい学校、明るい先生、そして明るい子どもたちを作るには、寡黙になるな、プラス思考で声を出そう。みんなの一步一步が明るくする。
- ・「心に残った部分をそのまま写す読書ノートによる指導」←大切な読書も「感想文を書きなさい」というプレッシャーが頭にあれば嫌になる。素直な感動の書写から生まれる楽しい読書である。
- ・「相手をよく見て、その人の変化を見つけて褒めてあげよう。」←先生と認めて欲しい学びのアシストへのアドバイス「子ども目線（協働目線）の授業観察」から発展したものである。
- ・物事の真実に目をそらさず、しっかりと見る講師に感銘←時事問題に対しても自らの意見を持ち、常に子どもたちの疑問・質問に大人として教師として答えようと努力している。具体的には道徳律と法律の間の問題、いじめによる自殺の問題などへの考察を紹介した。

自らが統計処理、生徒指導、授業での実践のうち、時事的問題に関連する内容を選びお話ししたが、共感していただけて嬉しく思っている。これら、内容の大部分には、今も課題として取り組んでいる。

お話しをしながら、自ら継承できるものとは、自分の日常の姿であり、共に教育という目標に向かい協力して努力する過程が生きた継承と、再認識した。教採ガイダンス、学びのアシストの活動も協働目線で共に歩み学び合う心が大切で、指導、指導と急いではいらないと、思いを新にしている。

自己効力感を高める「けん玉セラピー」

センター客員教授 寺西康雄

近年、自分に自信がもてない子どもが増えていると言われる。私が教育相談の中でかかわっている子どもたちの場合、その傾向が特に強い。元々、何らかの理由で自信を喪失している上に、日々の学校生活の中で、失敗や挫折を体験することが多く、より一層自信を失うという結果に陥る。

心理療法の主流が精神力動的なものから認知行動療法に移行しているアメリカでは、場面緘黙に対する治療として、症状が最も顕著な学校場面で教師が中心の支援チームにより段階的な介入プログラムが実施され、大きな成果を上げているという。「スモールステップ」と呼ばれる方法で、発語や子どもの交友関係を段階的に改善し、子どもの自己効力感を高めると同時に治療へのモチベーションを上げ、その効果を維持させるのである。

私は、教育相談において、「けん玉セラピー」（けん玉を活用したプレイセラピー）を大切にしている。けん玉セラピーは「スモールステップ」を基本にした取り組みであり、段階的にレベルアップするようプログラミングされている。そして、階段を一段一段上るように乗り越えていく中で、自己効力感を高めると同時に治療へのモチベーションを上げ、その効果を維持させることができる。段階的にプログラミングされたけん玉の練習を通して、「やればできる」という感覚をもつこともできる。

自己効力感をはぐくむためには、自分で実際にやり遂げられたという成功体験を積み重ねることが大切である。私は、けん玉セラピーを通して、子どもが「上手くできた」「上達した」「成長した」と体感できる機会を積み重ねることによって、「こんな自分にも、やればできるんだ」という気持ちを抱くことができるようにさせたいと願っている。そのために、子どもの表情やしぐさのかすかな変化を見逃さないようにしている。そして、気づいたときには、すぐに子どもに伝えるようにしている。

連水敬彦氏は、「私は、自己効力感というものの源を『失敗に向かっていこうとする心』だと考えている。人は誰も発達途上で何度か失敗する。誰にとっても成功の回数より失敗の回数が多いのは自明のことであろう。（中略）鼻歌交じりで達成した経験ではなく、成功に行き着くまで何度も失敗に直面したにもかかわらず、あきらめずに粘ってがんばったという経験こそが自己効力感の源だと考えられる」と述べている。

私は、けん玉とは「成功体験を積み重ねる遊び」であると同時に、「失敗体験を乗り越えることを学ぶ遊び」であると考えている。けん玉の級位の認定は、種目毎に10回中1～3回成功すればOKであり、成功の回数より失敗の回数が多い遊びである。10級から6級までは、易しい種目ばかりであるが、5級になると「飛行機」という難しい技が登場する。4級になると、さらに難度の高い「ふりけん」が分厚い壁となって受検者の前に立ちはだかる。それに果敢に挑戦していく中で、「失敗に向かっていこうとする心」が育ち、遂に乗り越えることができたとき、真の自己効力感が高まるのである。



第13回発達と臨床の心理学講座

センター准教授 下 田 芳 幸

東洋には“心身一如”あるいは“心身相関”という考え方がありますが、現在の心理臨床でもこの考え方が取り入れられ、第三世代の認知行動療法のように、心と体を一体的に捉えて支援する立場が優勢になりつつあります。

このような流れの先駆けとして、日本には、九州大学名誉教授の成瀬悟策先生が考案した「動作法」という方法があります。人の動作を意図・努力・身体運動という一連の心理的プロセスで捉え、ここを糸口に働きかけていく心理療法です。

この動作法は、動作療法という心理療法としての立場を確立しているほか、ストレスマネジメント教育でのリラクセス法として、学校教育の中にも取り入れられています。



参加者の動作を見立てる黒山先生（右）

平成22年8月28日(土)開催
長崎国際大学専任講師
心理リハビリテーションスーパーバイザー

黒 山 竜 太 先生

『姿勢から見る児童生徒の心の理解とアプローチ
～学校現場で役立つ心理臨床～』

今回は、この動作法の実践経験が豊富な先生をお招きし、学校現場での活用について、講義と実習を行っていただきました。



自分の身体に意外な気づきを得る参加者の皆さん

今回の講座では、意外と気づきにくい姿勢や動きの“クセ”にどう気づくか、そしてどう支援していくかについて、腕上げや肩上げ、前屈といった実際の課題（動作課題）を通して学んでいきました。

参加された方からは、今までにない視点が得られた、心と身体つながりが理解できた、という声のほか、体験した自分自身が心地よかった、学校現場でも適用しやすい、といった声も多数頂きました。

今回の講座が、先生方、そして児童生徒の皆さんのメンタルヘルスの一助となることを願っております。

報 告

第14回 発達と臨床の心理学講座

センター専任講師 石 津 憲一郎

発達障害に対する学校現場の関心は非常に高くなってきている。発達障害の子どもや大人への支援が充実していく一方で、包括的な支援に繋がりにくい場合も多くある。実際、学校としては発達障害の可能性に気づきながらも、親や外部機関とどのように連携すればよいのかは難しく、また必ずしも連携できるとは限らない。医療機関を筆頭に、外部機関と可能な限り連携したいという思いは現場にはある。基礎的な発達障害の知識とは別の視点から、よりよい連携について学ぶため、平成22年度冬の発達と臨床の心理学講座では、京都市発達障害者支援センターから千葉桂子先生をお招きし、「発達障害に対する援助 ―外部機関とのよりよい連携を目指して―」と題する講義を行った。

平成23年1月22日 開催

発達障害に対する援助 ―外部機関とのよりよい連携を目指して―

講師 京都市発達障害者支援センター 千葉桂子先生

当日は、うまく外部との連携がいくためにはどのようなことに心がけていくかといった視点に加え、外部機関と様々な事情から連携ができない場合に、学校現場ではどのようなことを行えるかについて、具体的な事例をもとにお話をいただいた。質問を踏まえたディスカッションが盛り上がるなど、現場の先生方の関心の高さが改めて伺える講座だった。



今年度は、「豊かな心をはぐくむ～変容する子どもの内面をとらえる～」を研究主題に実践研究を進めてきました。昨年度の研究の成果を受け、さらに一步研究を進めることを目指し、子どもの内面をよりきめ細やかにとらえようとしてきました。具体的方策として「ねらいを明確にした意図的・継続的な保育」「子どもの内面をとらえる記録の蓄積と共有」に重点を置いて研究を進めることにしたのです。今年度も、大学の先生方に各クラスにお一人ずつ専属でついでいただき、研究保育の指導助言はもちろん、日常の事例研究についても専門的なご意見をいただく等年間を通してご指導いただきました。

そのような研究の歩みの中で、6月24日(休)に独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 理事長小田豊先生を講師にお迎えし、保育フォーラムを開催しました。県内外から200名余りの参会を得、子どもの姿をもとに内面の読みとりについて多面的に見ることの大切さを学びました。小田先生の講演では、今重要視されている保育カンファレンスの試みとして、教職員が共通の尺度をもって深く子どもを見る目を鍛えることの一手法を紹介していただきました。園全体の保育者で話し合うことの意味や必要性を強調され、本園の取り組みの方向性を後押ししていただいた思いがしました。

また、10月には県新規採用教員研修会の協力園として保育公開を行い、新規採用の先生方のご意見や指導主事の先生の講評をいただくことで、幼児教育の本質を見つめ直すことができる貴重な機会を得ることができました。

来年度は「豊かな心をはぐくむ」を主題に掲げての研究のまとめの年度となります。子どもの育ちや保育実践力の高まり等の確かな手応えが得られるよう研究を深めていきたいと考えています。

よりよく思考する子どもが育つ授業の創造（3年度） —思考の道筋を生かす比較の場—

附属小学校教諭 草野 剛

附属小学校では、一昨年度より「よりよく思考する子どもが育つ授業の創造」という研究主題を掲げて研究に取り組んでいます。今年度は、6月2日に研究2年度目（副題「子どもの思考が活性化する比較の場の構成」）の成果を発表する場として、春の研究発表会を開催しました。県内外から多くの先生方にご批評をいただくとともに、公開授業の全教科において富山大学の先生方に指導助言をいただきました。

8月より、「思考の道筋を生かす比較の場」という新しい副題のもと、比較することによって子どもの思考が活性化する過程を明らかにし、そのような場を教師がどのように設定していけばよいのかについて研究しております。その新しい副題に沿って、10月から続いている校内での研究授業においても、大学との連携を密にし、学部の先生方にたくさんのご指導をいただいております。

現在、3年度目の校内研究授業も大詰めを迎え、今年度の成果を確認するべく、校内での授業検討に励んでおります。来年度も、今年度の成果と課題を生かし、研究や実践を積み重ねていきたいと考えています。



主体性の高まりをめざす課題学習 —学びあい 自ら学ぶ—

附属中学校 新田 稔

附属中学校では、「主体性の高まりをめざす課題学習—学びあい 自ら学ぶ—」を研究主題、副題として、平成19年から22年までの4年計画で研究を進めてきました。今年度はこの研究の4年目、最終年度の研究発表として、6月8日に教育研究協議会を開催しました。東部、西部教育事務所及び富士大学の先生方を指導助言者としてお迎えし、国語、数学、音楽、美術、英語、道徳、特別活動の発表及び全体発表、全体講演会を実施しました。授業を中心とした各教科の発表では、多くの参会者とともに研究主題、副題の解明に向けて協議し、研究を深めることができました。また、全体講演会では、文部科学省大臣官房企画官 牛尾 則文 先生を講師として、24年度中学校学習指導要領完全実施に向けて、「新学習指導要領のねらい～変わったこと、変わらないこと～」を演題にご講演をいただきました。

また、今年度は新たな取り組みとして、本校の校内研修会に他校の先生方等の参加を募った授業研究研修会を12月13日に実施しました。数学の授業及び授業協議会、茨城大学教授根本博先生（前文部科学省初等中等教育局主任視学官）の講演会を行いました。根本先生からは本校の研究に対するご指導をいただくとともに、参会者の先生方からもたくさんのご意見等をいただきました。

平成23年度からは研究主題、副題を「主体性の高まりをめざす課題学習—課題学習における言語活動の明確化と充実—」とします。本校が長年研究を進めている課題学習を言語活動という視点から研究を進めていきます。新学習指導要領においても言語活動の充実が重視されています。言語活動という視点で本校が取り組む課題学習を見つめ直すことで、課題学習における言語活動を明確化させ、その後、より一層、言語活動の充実を図り、生徒の主体性の育成を目指したいと考えています。最後に、平成23年度は6月7日に教育研究協議会を開催します。社会、理科、保健体育、技術・家庭の発表及び全体発表、全体講演会を予定しています。

地域生活につながる授業づくり

附属特別支援学校 野原 秀年

特別支援学校では、研究主題を「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～地域生活につながる授業づくり～」と設定して3か年計画で取り組みました。今年度が、最終年度です。

児童生徒が地域社会で主体的に活動する姿を実現するためには、学校生活においても、その姿を実現することが大切です。本研究では、教科別の指導、特に国語科と算数科・数学科を中心に、児童生徒がかかわり合いながら主体的に活動する「参加」の姿を目指しました。その結果、①学習課題（授業の節となる課題内容のまとめり）、②学習活動、③協同の学習機会などの「学習プロセス（児童生徒の学び方）の工夫」が必要であるということが分かりました。また、学習プロセスの工夫だけでなく、それを支えるためには教室環境や本校がこれまで開発してきた支援ツールなどの「支援環境の工夫」も必要であることが分かりました。さらに、個別的教育支援計画を基軸として、他の教師や保護者との連携を図ることで、学習の成果を地域生活につなげ、児童生徒が地域社会で主体的に活動する可能性を高められることが見えてきました。

本研究を進めるにあたっては、学部の小林先生、川崎先生、阿部先生、水内先生に何度も本校に足を運んでいただき、数多くの助言をいただきました。



小学部 国語科の授業から

センター教授 田 尻 信 豊

「教員・学生のための教育講演会」（学習環境部門主催）が平成23年2月11日（金）午後1時30分から人間発達科学部141講義室を会場に実施されました。今年度の講演テーマは「博物館を活用した活動～社会科教育・地理教育・歴史教育・国際理解教育からのアプローチ～」でした。講演者と講演題は、以下の通りです。

- 田尻信豊（富山大学教授）「歴史教育、国際理解教育から見た博物館活用」
- 田部俊充先生（日本女子大学教授）「地理教育から見た博物館活用」
- 多田孝志先生（目白大学教授）「学校教育から見た博物館活用」

当日は外部からの教員・博物館の学芸員の方々22名を含む134名の参加があり、講演会場に人間発達科学部第1棟で一番広い教室を用意しましたが、席が足りず隣室から椅子を運ぶほどの盛況でした。以下に、講演会テーマの趣旨と各講演の概要について報告します。

【講演会テーマの趣旨】

小学校では、現行学習指導要領の下で「総合的な学習の時間」の新設に伴い、学校と博物館の連携が提唱され、学校による博物館の積極的な活用が推進されることになりました。また、知識基盤社会の到来によって、知識や情報を日々更新していく必要が生まれてきました。その結果、新しい学び場として、博物館等の社会教育施設の活用が推奨されることになりました。小学校の新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」ばかりでなく、各教科においても、博物館などの社会教育施設の積極的な活用が求められることになりました。

人口100万人あたりの博物館数を見ても、富山県は長野県・山梨県に次いで全国第3位を誇っています。富山県は、学校教育、とりわけ小学校において、博物館の活用にあたって恵まれた環境にあるといえます。

新学習指導要領に基づく小学校の新教育課程が今年4月から全面的に実施されます。そのため、今年度の「教員・学生のための講演会」は博物館の活用にはスポットをあてて、検討することにいたしました。

【各講演の概要】

田尻の講演では、新学習指導要領における博物館の位置付け、田尻が富山県内の小学校を対象に2009年11月に実施した博物館活用に関する質問紙調査の分析、博物館を活用した実践例の紹介が行われました。そして、それらの議論をもとにして、歴史学習・国際理解学習での博物館活用の具体的な方法が提案されました。

田部先生の講演では、日本女子大学で田部先生が取組んで日本民家園との連携事業、米国オレゴン



多田先生による講演



教室に溢れる参加者

州の地理教員懇話会による教員研修の様子が紹介されました。地理教育での博物館の活用に当たっては、教科間の連携、地域との連携の必要性が提案されました。

多田先生の講演では、今日の教育の問い直し、市民的資質の育成の面からみた博物館活用、学習方法の改革としての博物館活用等について、紹介されました。多田先生の講演は、前の2講演を21世紀の学校教育という観点からまとめるものでした。

当日は、3つの講演とそれらの講演に対する熱のこもった質疑応答が展開され、大変充実した内容であったことを付記します。

【報告】 子どもとのふれあい体験

センター教授 田尻信豊

「子どもとのふれあい体験」は、今年（2010年）度で、12年目をむかえた。今年度の開講コースは次の6コースであった。

- ①科学で遊ぼうコース（担当教員：市瀬和義先生）
- ②ものづくりワークショップコース（担当教員：岡 敦先生）
- ③遊び援助コース（担当教員：小林真・若山育代・西館有紗先生）
- ④発達気になる子どもの援助コース（担当教員：川崎聡大・阿部美穂子・水内豊和先生）
- ⑤野外活動コース（担当教員：広瀬信・佐伯聡史先生）
- ⑥不登校児童生徒への支援コース（担当教員：石津憲一郎・下田芳幸先生）
- ⑦となみ野100キロ徒歩の旅コース（担当教員：松本謙一先生）

一年間の活動成果を発表し、その経験を参加者全員が共有することを目的に、「子どもとのふれあい体験交流発表会」が、2月16日（休）に人間発達科学部3棟341教室で行われた。当日は、受け入れ施設の担当者などをお招きして、パワーポイントを使った発表や楽しいパフォーマンスなど、3時間半に及ぶ発表はどれも充実したものであった。どの発表からも一年間の充実した活動の様子がよくうかがえるものであった。



パワーポイントを使った発表写真に関与する学生
(写真は平成21年撮影のもの)

【報告】 「学級担任論」／学びのアシスト・スタディメイト事業

センター教授 田尻信豊

人間発達科学部は、本センター所属教員が主体となって学部教員と連携して、富山県教育委員会の「学びのアシスト」・「スタディメイトジュニア」事業に協力し、学部授業「学級担任論」受講生の小学校への配置を行ってきた。「学級担任論」では、「学びのアシスト」「スタディメイトジュニア」事業を通じて、教職志望学生の資質・能力の向上をめざすことを目的としている。本授業も、今年度で5年目を迎えた。今年度はこれまで最大の102名（内訳「学びのアシスト」78名、「スタディメイトジュニア」24名）の学生が受講した。

学生は、年間45時間以上、配置校の指導教員のもとで継続的に活動を行った。同事業に対しては、県民から高い関心と期待が寄せられている。また、受講生に対して継続的に実施しているアンケート調査（9月、11月、1月、3月実施）でも、子どもとのふれあいや配置校の教員との交流を通して教員になりたいという気持ちが次第に増加してきたという結果が出ている。「学級担任論」／「学びのアシスト」「スタディメイトジュニア」事業は、地域との連携を目指した大学の新しい教員養成システムとして重要なものと定着してきたと言えよう。

内地留学研修を終えて

窪 田 俊 介

これまで、「カウンセリング」は自分にとって特に関係のない分野だと思っていました。今回、富山大学での半年間の研修に参加させていただくこととなり、自分は一体何を学ばよいのだろうかと悩みながらこの研修はスタートしました。久しぶりの大学生活の雰囲気新鮮な気分を味わいながらも、「教育相談」「学校カウンセリング」「生涯発達心理学」といった講義を受講するにつれ、「カウンセリング」というものに対する自分の考え方も変わっていきました。講義の内容は、学校現場における指導の参考となる内容ばかりで、今までの自分の指導を振り返り、反省するよい機会となりました。同時に、もっと「心」の面から生徒を理解していく方法について深く学びたいと思うようになりました。特にストレスやサポートの在り方、それぞれの年代における発達課題等について学んだことは、今後の自分の指導の参考となる貴重な体験となりました。

学校現場に復帰してからは、生徒との接し方も少し変わったように自分では感じています。例えば、問題行動を起こす生徒に対して、これまではその行動にばかり目が向いていましたが、「この生徒の行動には、どんな感情の問題が影響しているのか」と少し余裕をもって生徒と接することができるようになりました（時にはそんなことを言っただけではいられないこともあります）。冷静に生徒の行動を見つめ、状況に応じた言葉かけを意識するようになったことで、今まではあまり考えることのなかった生徒の「心」の面がほんの少しではありますが、感じられるようになったのではないかと感じています。

研修中はセンターの先生方には、大変お世話になりました。私たち研修生の研究に対して適切な指導や助言を与えて下さったことはもちろんのこと、大学での研修生活がスムーズにいくよう細かな配慮をしていただいたり、休日にはレクリエーション等も企画していただきました。おかげで、本当に充実した研修生活を送ることができました。この研修で学んだことを一生の財産として、今後の教育活動に生かせるよう努力を続けていきたいと思っています。本当にどうもありがとうございました。

内地留学生として

只 石 展 英

半年間という長いようで短い内地留学が終わりました。初めて経験させていただくことが多く、とても新鮮に感じました。特に、印象に残ったのは大学の先生方の授業が、私が十数年前に受けたそれとはずいぶん違うことでした。実践センターの先生方は、体験と理論が結びつきやすいように、とても工夫されておられることが私たちに伝わってきました。小川先生の「心理学教育論」では、探求科の高校生に心理学を導入するという設定のもと、模擬授業を行いました。下田先生の「発達臨床心理学」では箱庭療法や描画療法を体験することができました。石津先生の「学校カウンセリング特論演習」では、聴く訓練を意識して、模擬面接を行いました。寺西先生の「教育相談を学ぶ会」と「けん玉セラピー」は、いじめについてじっくりと考えさせられる内容でした。

今回の内地留学で学んだことによって、生徒と向き合うときの私たちの引き出しの数が確実に増えました。増えたことにより、生徒と向き合うときに余裕が生まれ、生徒にとって心地よいかかわりになると信じて、今後の教育実践にあたります。

半年間、センターの先生方には本当にお世話になり、感謝しております。

報 告

第77回 国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター教授 小 川 亮

平成22年9月16日(金)、三重大学教育学部附属教育実践総合センターにおいて、表記の協議会が開催された。富山大学からは、小川センター長、田尻教授の2名が参加した。午前の部は、最初に園屋会長(鹿児島大学)、上垣三重大学教育学部長の挨拶に続いて、事務局から議事録の確認と平成21年度の決算報告、協議会の規約の変更についての協議がなされた。午後の後半は、NPO法人バンダア理事長の森由美子氏による講演「多文化共生の時代におけるICT児童国際交流」が行われ、ICTを活用した大学の地域連携の可能性について学ぶ機会が作られた。

午後の前半が全体会で、各センターの現状と将来計画、ならびにセンター協議会の今後の方向性について情報交換が行われた。

その後部門別の会議となった。教育工学・教育実践部門の分科会では、教育実践研究への取り組み等について情報交換が行われた。

第78回 国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター准教授 下 田 芳 幸

平成23年2月18日(金)、東京学芸大学において、表記協議会が開催された。富山大学からは、小川センター長、下田の2名が参加した。午前の総会に引き続き、午後は、デジタル教科書と教育実践演習に関する報告や意見交換がなされた。

デジタル教科書については、ICT支援員に対する支援(現場は何に戸惑いやすく、どう支援するのがよいか)に対してセンター協議会としてできること、また和歌山県での取り組みより、従来型学習の補完機能としてのデジタル教科書を位置づけ、現場が、負担感より学習効果を実感できるような手立てが必要であることが報告された。

教育実践演習については、参加大学全ての現状が報告され、ポートフォリオや評価基準など、各大学で模索している様子がうかがわれた。

その後部門別の会議となった。教育臨床部門では、ほとんどの大学で、学部業務との兼担の中で、教育臨床に対する大学・地域のニーズはますます高まり、教員が多忙を極めていることが共有された。また、やりくりをどう工夫していくか、の情報交換がなされた。

日本教育大学協会北陸地区 教育実践研究指導部門研究協議会報告

センター講師 石 津 憲一郎

平成22年10月25日(月)に信州大学しなのき会館において、表記協議会が開催された。富山大学からは、小川センター長、石津の2名が参加した。以下のような協議が行われた。

①教育行政との連携、人事交流について

協議題として上越教育大学から地方行政との連携が出された。上越教育大学では人事交流を元に学生指導を手厚く行っている。他大学ではこのような形の人事交流ではなく、例えば信州大学では

県の総合教育センターから客員教授に来てもらい授業を担当してもらったり、金沢大学のように附属学校のための人事交流というところもあった。大学によっては、全学からの予算でこうした人事交流が行われるところや、学部のG Pによって行われているところなど実態は様々であった。

②学部改組、センター改組について

照合事項として、学部改組とセンター改組についてが信州大学からあげられた。富山大学はH18年に学部改組が行われ、金沢大学もH20年に8つの学部が3つの学域に変更されたことから、現在の学部改組は検討されていないが、福井大では教職大学院と実践センターの業務が実質的にオーバーラップするところもあり、今後の業務分担の必要性とともに、センター改組の可能性が考えられることがあげられた。信州大では、ゼロ免課程についての方針を学部にて検討しており、現在のところゼロ免課程を残すことが基本的な方針として、今後の動向を見守ることが示された。

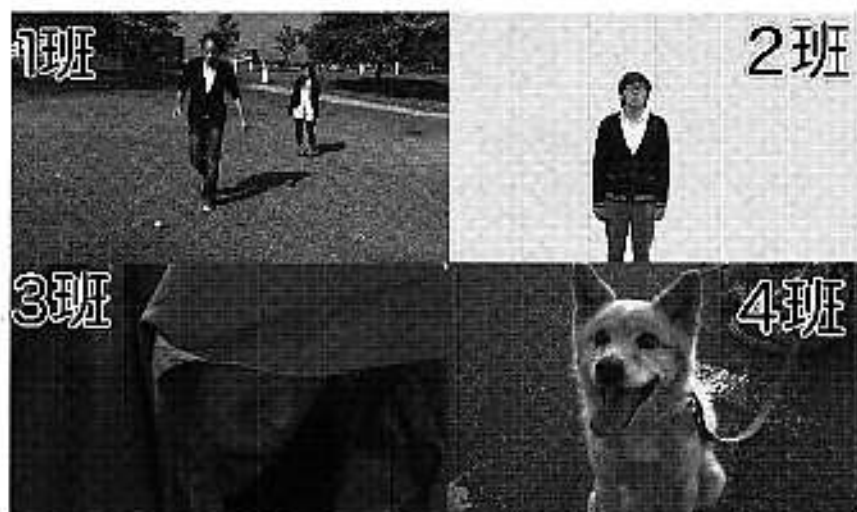
Visual Triathlon 2010報告

センター教授 小川 亮

平成22年11月12日(金)～11月14日(日)の3日間で、ヴィジュアルトライアスロン2010が実施されました。今年度のテーマは「『えっ、今なんて言った?』から始まるショートムービー」でした。講師に高信行秀氏(ターミガンデザインズ)をお迎えし、2泊3日の映像制作講座を実施しました。例年通り、学生が4つの班(1班あたり4～5名)に分かれて、まずはテーマからどのようなストーリーを展開するかを検討しました。次にストーリーを展開するのに必要な映像作成と効果音や音楽の作成を分担してすすめ、部品を組み合わせたり、映像に効果をつけたりして作品を仕上げていきました。

結果的に4つの作品が仕上がりました。高信講師、上山先生、鼓先生、小川からコメントを評価をもらって終了しました。それぞれの作品については、以下のURLで確認できますのでご覧ください。

VT2010のHP <http://mmcom.edu.u-toyama.ac.jp/vt/vt10/index.html>



業務報告

センター日誌 平成22年度の実践センターの主な行事

平成22年 (2010)

- 4月1日 前期研修生 オリエンテーション
- 4月22日 センター会議
- 5月6日～7日 教育実習事前指導 (他学部)
- 5月17日 センター会議
- 5月18日 附属教育実践総合センター運営委員会
- 5月21日 センター会議
- 6月30日、7月7日、7月14日 教育実習事前指導 (人間発達科学部)
- 7月22日 センター会議
- 8月28日 発達と臨床の心理学講座 (第13回)
- 9月8日 センター紀要編集委員会
- 9月17日 第77回国立大学教育実践研究関連センター協議会 (三重大)
- 10月6日 センター紀要編集委員会
- 10月13日 センター会議
- 10月15日 日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会 (島根大)
- 10月22日 センター会議
- 10月25日 日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会 (信州大)
- 10月27日 教育実習事後指導 (人間発達科学部)
- 11月9日 センター会議
- 11月12日～14日 ビジュアルトライアスロン2010
- 12月21日 センター会議

平成23年 (2011)

- 1月11日 発達と臨床の心理学講座 (第2回)
- 1月19日 センター会議
- 1月25日 教育実践総合センター紀要第3号 (通巻19号) 発行
- 1月22日 発達と臨床の心理学講座 (第14回)
- 2月8日 教育実習運営協議会
- 2月18日 第78回国立大学教育実践研究関連センター協議会 (東京学芸大)
- 2月11日 教員・学生のための教育講演会「博物館を活用した活動」
- 3月11日 センター会議
- 3月31日 センターニュース発行

表. 平成22年度におけるセンターの相談件数

	面接による相談		電話・メール相談	合 計
	学内者	学外者	件 数	
本人のみ	0	10	15	25
保護者のみ	1	40	10	51
学校関係者のみ	0	15	20	35
本人と保護者など複数	1	15	0	16
教師個人	0	30	10	40
合 計	2	110	55	167

編集後記

平成22年度も最後の月を迎えて、1年間を振り返り、なんと1年間の慌ただしかったことかと感じています。センター長としては2年目ですが、従来からの仕事に加えて、実践センターの紀要編集や、人事の問題など、役職で指定されている業務が入り、それに学部の授業、大学院の改組と、なんだか目の回るような1年でした。もちろん、変動しているのは大学だけではなく、学校教育全体が変革を求められる時代の流れや、経済的な問題、高齢化の問題、過疎化の問題、中央と地域の共生、自由化の波、国際的な勢力関係などなど、世界中が変革の季節を迎えているように見えます。しかし、子ども1人1人の成長を助け、次世代につなげていく教育の役割と、その大切さは変わることがありません。人間発達科学研究総合実践センターの役割は、教師教育、教育相談、情報技術の側面から、学部と教育現場を結び、子どもの発達を支援し、教育を改善することを目的としています。これからも、しっかりとした歩みを続けるために、センターの所員が一丸となって問題に取り組んでいくことが求められていることをしっかりと認識することが重要と思います。

(センター長 小川 亮)

東北関東大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

印 刷	平成23年3月31日
発 行	平成23年3月31日
編集発行	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター 代表者 小川 亮 〒930-8555 富山市五福3190 電 話 076-445-6380